

p133,210

246

そのとき若山が「アッ」と短く叫んで左足を滑らせ、ジッヘルしている石原のいる地点にむかって墜ちた。一瞬、石原は反射的に次に起る事態についてザイルを全身の力で支えようと身体の重心を低くして構えた。当然トップの落下にともなう衝撃を十分に予知していた。ラストの沢田も石原にかかる衝撃にたいしての補助的な態勢を整えていた。トップとセカンドとの中間には上方の岩の突起を支点として繋がっているのだ。まず落下の衝撃は岩角によって減力されてのちに確保者の肩におよぶのが、この場合の順序なのだ。それにもかかわらず石原の掌にしたザイルにはほとんどショックはなく、若山の滑落の直後に切断されたザイルの一端が虚空から彼の膝もとへ落ちて来た。その事態は下の二人には信じがたく呆然として黒い影をのこしておちて行った若山にむかって「ゴローチャン、ゴローチャン！」と大声で絶叫したのはそれから暫くした後のことである。どう観察してもトップの滑落は岩角の支点から五十センチ内外であり、その落下距離、岩壁の傾斜からずり落ちたようなスリップの状況から推理してもザイルの切断は常識的にはありうべからざる経緯なのだ。とうに寿命のつきた古い麻ザイルならともかく、こんどの山行のために前年十一月購入したばかりの新品のナイロン・ザイルなのである。東京製綱の製品で、八分ザイルでもマニラ麻十分の抗張力に匹敵するし、もっとも重要な衝撃力についても約三倍の強度を有するとの折紙つきの登山用ナイロン・ザイルのはずなのだ。若山の滑落と同時になんの手応えもなくザイルが他愛なく薬紐のように切断された……二人ともなにか魔法の呪縛でもうけたように A フェースの風雪の岩棚に絶望的な一夜を送らねばならなかった。

245

「ナイロン・ザイル事件」前後

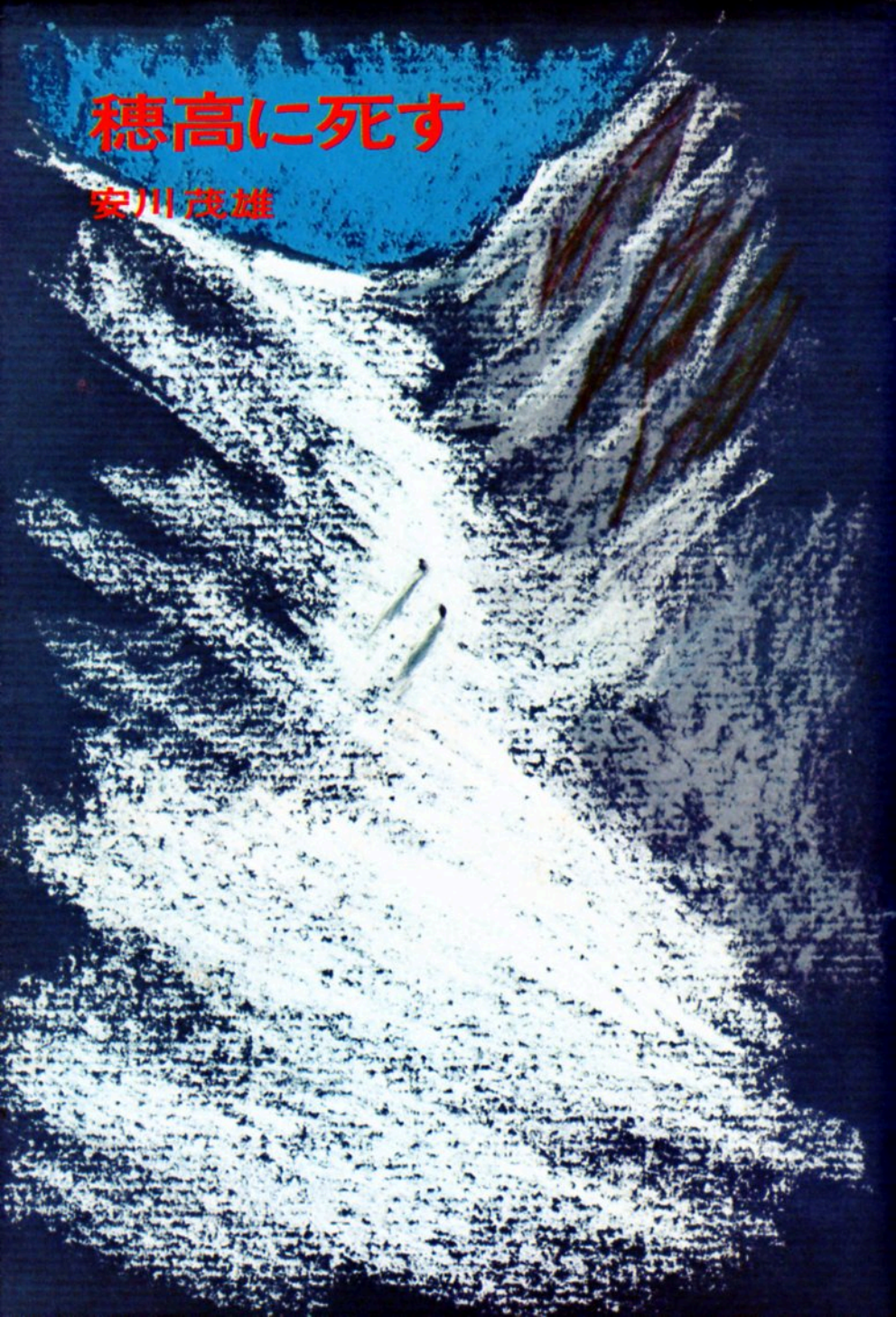
戸山高校、立教大学パーティが入山するのに数日おくられて岩稜会パーティ十二名も上高地の雪を踏んだ。冬季前穂四峯、東壁登攀が目標で奥又白の池畔にベースキャンプを設営した。年末の天候は西穂山上と同様で、吹雪がつづき行動は停滞しがちだった。だが翌年元旦を迎えてようやく天候も小康状態をみせはじめ、石原国利、若山五朗、沢田栄介の三人が東壁に向った。午前六時又白池畔のキャンプを出発して八時に取付点に達して登攀を開始したが、壁の状況は極度に困難で、A フェースの終了点から約四十メートルで日没となりビバークを余儀なくされた。三人はツェルトにくるまり氷の厚く張った岩棚の上で一夜を明かし、翌二日午前七時半ふたたび登攀を開始した。

もはや頭上には四十メートルの壁しかのこされていない。前日に引きつづいて石原がトップとなり直上約十二メートルのクラックを登り、突起状の岩にザイルをかけて、なんとかダブルのザイルを利用して自己吊り上げ気味にオーバーハングを越えようと三回試みてみた。だがかぶった岩は頑強に前進をこぼし、もう一息で突破できそうにみえながらも前日からの疲労とビバークのための体力不足に力尽きて石原は下のテラスへ後退した。そこでトップを若山に交待することとなりジッヘルは石原があたることとなった。

「オーバーハングを避けて右手へ振り子式にやったら」石原が指示したので、若山は突起にかかっているザイルを支点にしてトラバース気味にオーバーハングを斜めから越えようと攀じはじめた。若山が動きだすと、石原は上方を注視しつつ慎重にザイルをコントロールしはじめた。トップが岩の突起から右上方へ攀じ、しぜんザイルは支点を中心にして時計の針を逆に進ませたように四十五度近くばかりかけていた。

穂高に死す

安川 茂雄



「ナイロン・ザイル事件」前後

昭和二十九年ようやく戦後の復興も目ざましく冬山も賑い、戸山高校パーティ四名西穂へ——暴風雪の二昼夜、山稜上の戸山パーティ遭難か？——二十四日朝、独標付近に裂けた夏用テントと凍った二死体を立教パーティ発見——数日おくれ松本県あがたガ丘高校パーティも奥明神沢で雪崩遭難——さらに翌三十年一月三日三重岩稜会三名、前穂東壁でナイロンザイル切断のため一名死亡——井上靖『氷壁』によって描かれたアルピニストの愛と死。

1

昭和二十九年のクリスマス・イヴの当日。午前十一時頃であった正月用の写真の撮影を済ませた朝日新聞の平木靖記者が西穂山荘に戻って一服していると、立教大学山岳部の寺畑哲朗リーダーが蒼白い雪焼けた頬を硬張らせて飛びこんできた。懸命になって戻って来たらしく呼吸をはずませながら、小屋に居合せた碓井徳蔵、宮原進、平木記者の三人に言った。

「凍死だ……戸山高校の人たちが二人凍死している……テントが破れ凍傷で全身が赤紫色になって二人の人が仆れていた。すでに息はない。なんとか早く連絡をとってもらいたい。」

それだけ一気に言う寺畑リーダーはいくらか落ちついて戸山高校パーティの遭難の詳細について報告してくれたが、つい二日前この小屋からまだあどけなさの漂っている元気な顔で手を振りながら出発した四人の面影が三人の臉に悲しく甦ってくるのである。屍体は二人だというが、伝えられた遭難現場の状況から予想して、まず全員凍死したことは疑いなかった。

「やっぱりあの暴風雪に巻きこまれてやられちゃったんだな。」

碓井は、二十二、三の両日夜昼なく吹きつづけた風雪のすさまじさを想いだして独白するように言った。戸山高校——といっても戦前の松本高校のような旧制の高等学校ではない。旧「府立六中」で戦後占領軍によって改革された六・三・三制による高校なのだ。旧制の学年からすれば中学五年生——十七、八才

ぐらゐの齡頃にあたる少年たちであった。あの昭和二十年八月十五日からようやく足かけ十年、敗戦の傷痕も年ごとに癒えて、衣食住の国民生活も一時の窮乏も嘘のように日本人の表情は脂肪の厚味もまして豊かに明るくなっていた。

その年の四月には世界平和会議が開催され、十月にはフランスのルーヴル展が上野で催されるなど平穩な世相がつづいた。山々にも登山靴をはきリュックザックを背にビッケルをもった登山者の姿がシーズンごとに増加の一途をたどっていた。前年の五月にはヒマラヤ・マナスル山の第一次遠征隊が派遣され、京大ではアンナプルナへでかけた。登山用具店、デパートの運動品売場にはさまざまな登山装備があられんばかりに陳列されて、その復興はめざましく、化学繊維——ことにナイロン製品のテントやザイルなど登山者の憧れのまとなった。各大学山岳部、一般登山団体のパーティは四季の別なく槍・穂高連峯の登頂を競い、つい数年以前の寂寥とした冬の上高地周辺の静けさを知る者には信じがたいような変貌であった。その年の十一月二十八日、富士山中腹で冬山トレッキング中の東大、日大、慶大パーティがときならぬ乾燥雪崩のために十五名の犠牲者をだしたのはまだ耳新しい惨事のはずだった。この戦後最大の山岳遭難から一月もしない十二月中旬、すでに上高地には冬山登山のパーティが隊列をくみ、陸統として雪の梓川みちを繰りこんでいた。

戸山高校もそれらのパーティの一隊として十二月十六日上高地へ入山し、翌日西穂山荘へ登った。すでに荷上げのためにいちど十一月初旬入山して、はじめの計画だと明神東稜より前穂を登頂しようと企図していた。ところが碓井、宮原の二人が高山気象観測のために十月初旬から翌年まで越冬するという噂を耳にして、計画を西穂、奥穂行に変更、徳沢園からこの山荘に荷物を移動させたのである。一行が、予定どおり十七日に元気な姿をみせた頃、すでに穂高連峯は根雪も十分に積もって、いくどかの風雪に磨かれて

本格的な冬山の風貌をみせている。西穂山荘も十一月初旬にはサイダー、ビールが凍り、室内にツララがたれさがるほどの温度となり、十二月になると小屋の周囲には一畝ほど雪が積もっていた。

翌十八日、戸山高校パーティは、上高地からの荷上げと、独標付近の偵察のために二人ずつで二班に分れて行動した。気象観測のため越冬中の二人も根からの山好きであるだけに、登山者の経験の有無を見分けるには習熟していた。四人の入山で小屋は賑かになり気がまぎれたが、一瞥してどことなく頼りなかつた。まだたった一晩同じ屋根の下で過ごしたにすぎないものの、彼らの挙措言動があまりに無邪気であり奔放にみえた。リーダーとして教師も一人として参加していないし、夏の槍ヶ岳あたりの山小屋でたのしげに騒いでいる高校生のパーティと変わりなく、厳冬の穂高を登るにはいささか荷がかちすぎているかにおもえた。ことに話に聴いていると西穂に前進キャンプを設営し、さらに雪洞を掘って奥穂登頂を試みるのだと壮語しているだけに彼らの雪山での経験がどのくらいのものなのか案じられてならないのだが、その危機感も午後になっていくらか和んだ。

立教大学山岳部パーティが十五名大挙して山荘に姿をみせたからだ。寺畑リーダー以下三十五日間の予定で西穂山荘をベースキャンプにして槍ヶ岳までの極地法登山のため、同じ一本の山稜上での行動なのだから立教隊は、しぜんあの四人の少年パーティの遭難監視役になつてくれると信じられたからだ。どうやら気象データーから類推すると、数日間つづいた好天も十八日を境にしてくずれ気味である。

十九日、日が昇ると朝焼けだった。蒲田川をへだてた笠ヶ岳の雪の稜線が朱く染めあげられていたが、

しだいに雲量をました。風速三・九、最低気温マイナス十一度。朝のうち北方にいくらか水たまりのような小さな青空がみえていたが、午後から雪がちらつきはじめた。雲のはげしい常念山脈へのうごきからも低気圧が徐々に近づきつつあるかにみえる。

立教パーティは、第一キャンプを西穂の第二峯に設営するために山荘を出発した。戸山パーティも前後してでて行ったが、パーティの眼鏡をかけた一人（独協高校の金子隆司）だけは頭痛のために残留して三人である。雪は一日近くあり、風は数十回で飛騨側から吹きつけた。立教パーティは、整然と行動をおこして西穂をこえた、一つ目のピーク付近にテントを設営し、三人のザイル工作隊をのこすと午後、山荘にもどってきた。戸山パーティも独標手前まで荷上げして昼過ぎにかえってきた。午後からは天候は荒れ模様になり雪がよこなぐりに吹きつけて、森林限界以下にある山荘でありながら風雪は小屋の梁や根太を揺りうごかしていた。

二十日は前夜の雪もやんで雲一つない晴天になった。東には梓川をへだてて霞沢岳が朝日をあびてクリムキーのように聳えている。立教パーティは第一キャンプに向けて出発したが、十時になると早くも天候はくずれた烈しく雪が降りはじめ、風が吹きはじめた。まだ第一キャンプまで行きつかないうちで、立教パーティはたちまち乳白色のガスに包みこまれて前進不能となり、荷物も途中でデポして山荘へ引きかえた。戸山パーティも立教のあとから健気にもキャンプの建設のために行動をおこしたが、独標手前で立教隊と出会った。彼らも悪天候のために独標すらこすこともできず山荘へ引きかえた。翌日も朝は晴れあがっていた。雪もやみ払晩には星が降るように輝き、凍みかげんも上乗だった。東方には雲海がみなぎり、気温はマイナス十八度、風もさして吹いていない。眺めも八ヶ岳まではっきり遠望された。午前七時に立教パーティは山荘を出発し、戸山高校も追いかけるようにして山に向った。積雪は小屋付近で八

十六度、雪はまぶしく乱反射している。午前十一時半に西穂山頂より一つ天狗のホルに近いピークに張られた第一キャンプに到着。メンバーを交替させたの帰途にかかると、西穂より一つ山荘寄りの鞍部に戸山高校パーティが二人で天幕を設営中だった。いくらか飛騨側によった斜面である。軽く挨拶をかわしてのち独標付近でさらに二人の戸山パーティに出会った。

この朝平木記者も、写真撮影のために独標まで一行とでかけて戸山パーティと掌を振って別れている。「元気でやれよ、気をつけてな」と言うと、「ありがと、元気で行ってきます」と答えて西穂山頂をめざして登りだしたが、ザックの上にはマッド代りの炭俵がしぼりつけられてあった。立教パーティの装備に比較すると、なんとも貧弱であり、この三、〇〇〇の冬山と闘うには見劣りがした。

この夜から戸山高校は山荘にかえらず天幕生活に入ったわけだ。天候は好天がつづき夜になっても星が切子細工のように空にまたいた。だが、この天候も一日ほっきりで夜半から天気はくずれはじめ、早朝すでに小屋の外は風雪がうなり、風速計は二十一、半近くを示している。小屋も半分近く雪で埋めつくされ夕刻まで寸秒の休みもなしに吹きつづけた。山荘の内部も雪が吹きつけて窓は雪のために埋めつくされて穴蔵のように暗くなった。今シーズン冬になつての最初の大雪で、ストーブの煙突はへし折れて、折れ口から風と雪と逆流して薪も燃えつかないほどだった。観測データによると気温マイナス十七・五度、雪は昼までに百十五センチ、風速二十一・四——まさに暴風雪である。

二十三日も午前中吹きまくり午後になっていくらか風力はおとろえたが、雪はいぜん降りしきっていた。十二人の立教パーティは西穂のキャンプの三人がどうなったか心配していたが、やがて戸山高校パーティについてもその安否が気づかわれならなかった。この山荘内部にいてさえ便所は雪に埋もれ、風は屋根を吹きとばさんばかりのひどい荒れようだった。上高地では河童橋が風にゆれて渡れず、小梨平の茶店の

屋根など吹きとばされ、樹もかなり倒された。二十年ぶりの暴風雪といわる凄じさだった。

越冬の二人と平木記者は、戸山高校の四人についてそれぞれに不吉な予感をいだいていた。はたしてこれだけの風雪の中で彼らに冷静な判断と沈着な行動が十分にとれるかどうか疑わしかったからだ。とくにリーダーらしい経験者も年長者もいないし、体格だけは立派であるが、どことなく幼いところが目立ち、まるで見様見真似の冬山といった印象である。装備もいとおう冬山登山者らしいといった程度だったし、平木記者の眼にしたマッド代りの炭俵などこの悪天候を逞しく生きぬけるかどうか不安でならなかった。しかし、すぐ近所には立教パーティのキャンプのあることも知っているはずだし、万一の折には救いを求めて合流するだろうとも樂觀視したりして天候の恢復するのを待ち望んでいたのだ。

3

三日ぶりで暴風雪はやんだ。二十四日のクリスマス・イヴの日は朝から静かに明けた。まるで交響楽の幕でもおりたように小屋の外はひっそりとして、近くの林の中から鳥の啼き声すらきこえてくる。山荘は雪で屋根からすっぽりと包みこまれて入口の扉を開けるのに大騒ぎだった。樹々は白いモンスターのよう、信州側に身を傾け飛騨側からの吹雪のすさまじさを無言のうちに告げていた。眼下の上高地もアイスクリームでも流しこんだように雪で一面こんもりとふくれあがって森閑としている。

朝食後、七時に寺畑リーダー以下全員で、西穂の前進キャンプへ出発した。二日間たっぶり休養している、十二人の若者たちは元氣いっぱい腰高の積雪をラッセル車のように威勢よく西穂へ向った。山稜へでると積雪は硬質ガラスのように凍りついて、アイゼンのツアッケもはねかえすほどだった。独標を越

えて西穂直下のコルへでると戸山高校の天幕がみえてきた。あの中に四人がいるのだろうか？——とみんな怪訝な面持で、いくらか傾いた天幕のあまりの静けさが不可解でならなかった。吹雪のあとのこの好天氣なら一人や二人はテントの外へでていなくてはならなかったし、その周囲に踏跡のないのも奇怪だった。あるいは立教のキャンプにでも避難したのであろうか？——とも臆測してコルへ足早にくだった。

天幕がすぐ目前になると、二人の人間が雪をかぶって身じろぎもせずにいるのが寺畑リーダーの視野にいった。一人は横たわっており、一人は坐ったままだ。『凍死』『遭難』……もはや手の施す術もなかった。あの二日間の風雪のすさまじさがすぐ脳裡にうかんできた。腕時計をのぞくと午前十時十五分。すぐに周辺を手分けして調査しはじめた。まずテントは引き裂かれて、すでに雪はたっぶり内部に降り積り、寝袋が三つおかれてあるだけだ。あとの二人の姿はどこにもみえない。付近を仔細に調査すると、薄く雪をかぶっているのど気づかなかったが、彼らの備品があちこちに散乱している。揃えたままの一足の靴、散らばった餅、堅パンや罐詰などの食糧、アイゼンやビッケルなどの登攀用具。まさに完膚なきまでに風雪に叩きのめされていたが、それにもまして悲惨だったのは天幕が使い古したらしい布地の夏用だということだ。内張りもなく支柱も貧弱だし、とうていあの暴風雪に堪えようもなかった。

「むごいなあ、これじゃあまりむちゃだ。まるで夏山装備だもの。」でも哀れだ。こんなテントであの晩すごしたんだとしたら……。「ことさらに風当りのつよい飛騨側のコルに設置するなんて、信州側ならいくらか風も弱い岩のかげもあるのに……」そんな声が立教パーティのあちこちから囁かれていた。破れた天幕の端にはビッケルが四本支えの代りに突きささっている。破れ目はいくどか修理したらしく木綿糸で簡単な応急修理がほどこされてあった。

二人の凍死体は発見されたが、あと二人の姿はどこにも見当らない。改めて二遺体を刻明に調べてみる

と片方は靴をつけザイルを手にして坐りこんでおり、もう一体はテントの布片をかたくにぎりしめていた。寺畑リーダーは、ただちに登山計画を一時停止して全員搜索と屍体の収容にあたらせることとした——。かくて寺畑リーダーは西穂山荘へすぐに戻り、この惨事を小屋の三人に報告したのである。越冬パーティの宮原進は私用で上高地へくだるところだったので、そのまま急を帝国ホテルの冬季小屋へ連絡してもらった。しかし、パーティが戸山高校生という以外には名前も住所も分らず連絡方法もなかった。ことに二体の凍死体が四人のうちの誰なのか、行方不明の二人が誰なのか、見当もつきかねていた。

同日午後ただちに立教パーティは二遺体を寝袋につつもうとしたが、坐っている一体はそのまま運ばざるをえなかった。まるで氷塊のようにカチンカチンに凍りついていたので、なんとか独標と山頂の間まで運搬したが天候はくずれて中止せざるをえなかった。一方、越冬パーティの一人碓井徳蔵は彼らの使用した部屋を再調査した結果、やっとダンボール函の中から風呂敷包みにくるんだ衣服、定期券、財布を発見した。なかに学生証明もあって、島田敏彦（二年生・十八才）、伊豆野英二（三年生・十八才）、今井康夫（二年生・十七才）の三人は判明した。あとの一名が不明だった。寺畑リーダーは、そこに貼付されてあった写真と凍死体の容貌から推定して一人の坐っていた方が今井、もう一人が姓名不明の少年ではないかと思った。同夜クリスマス・イヴなのに山荘内は沈痛な雰囲気のみたされ、下界の賑いなど信じがたいくらいにおもたげだった。

翌二十五日風雪のために行動不能。二十六日、いくらか風雪がやんだので引きおろしに出発。午前九時、もう一体の大柄の坐ったままの凍死体を現場からおろすのだ。そこで天幕内をもう一度調べて隅にあった遺品のリュックザックの一つを開けてみた。なんと衣服、食糧、寝袋まできちんと収められており、そのうえ石油コンロなど使用された形跡はない。これらの点を推理すると、四人は天幕を張り、まだろくに食

事の支度もしないうちに強風にあおられて破損し、そのうちに風雪がひどくなり、收拾しがたくなったのであろう。そのあげくに疲労困憊して凍死したのではないかと判断された。作業は午後一時天候悪化のために中止して、遺体は一応独標ちかくまで運ばれた。

二十七日も吹雪。二十八日になって天候も回復しどうや独標下まで屍体をおろした。この頃には戸山高校関係者やOBなどの救出隊が入山して、姓名不詳の一人も金子隆司（独協高校三年・十八才）と判明した。二十八日天候はまったくおだやかとなり作業もはかどった。二十九日上高地へ下り死体検屍のち玄文沢出合付近で茶毘にふされることになった。

4

この年の冬山——やはり穂高へもう一隊の高校山岳部パーティが入山していた。地もと長野県の県ガ丘高校山岳部一行で、戸山高校の惨事が上高地に報告されて数日たった二十六日にホテルの冬季小屋に姿をみせた。小屋は合宿をすませた法政大学山岳部や遭難関係の人々でこった返している。パーティは十人で同じ高校でも顧問として三沢教官や矢野源一先輩なども参加しており、訓練もこの入山のためにゆきとどいていた。こんどの奥穂登頂のためには、三月の雪上訓練、五月の白馬合宿、夏のアルプス縦走などでトレーニングを実践し、新雪前後の十一月に二度も荷上げ、偵察にも入山している。すでに十一月に富士の大雪崩があり、入山すると西穂での戸山高校パーティの遭難の話や警告的に聴かされたのであるが、別に躊躇することもなかった。夏用天幕を一月の穂高山に設置するなどの遭難批判を耳にしていたし、同じ高校生だからといって同一視されたくない山への自負心があった。隊員は三年生三人、二年生三人、一

年生二人でウィンパー型冬用天幕三張を用意してきた。

二十七日吹雪のなかを午前八時にホテルの冬季小屋を出発し、岳川谷の森林帯へ入った。左岸の道をスキーで登ると、途中に東京医大、専修大などの山岳部のキャンプがあった。一行は夏の重太郎新道が奥明神沢を横切る白樺林の中に五人用ウィンパーを二つならべて張り、雪塊や補助支柱などで補強して設営を完了した。翌二十八日は晴天で、前穂山頂下に前進キャンプを進めることになった。雑煮をたべてから中野チーフ以下五人はキャンプ設営のために、他の四人は上高地へ荷上げのためくだった。予定どおり森林限界上部まで荷上げしたが深雪のためにラッセルは肩を没して全員くたきたにしろかれた。夜ラジオの気象通報に耳を傾けると、どうやら元旦まではこんな状態で、二日からくだり坂だという。中野チーフは、すぐ日記帖をとりだして、「十二月二十八日、上高地のベースハウスに残っていた食料を全部サボートさせた。これで初めて完全なるベースキャンプができあがった。これから一週間ここをベースとして……」と記していた。米一斗五升、味噌三貫目、餅三五〇切、パン二貫目といったふうにベースに集積された食糧だけでも一山はある。

二十九日、まだ夜中といつてよい午前二時、すでに炊事当番が起きはじめラジュースが威勢のよいうなり声を発しはじめた。天幕のシボリの紐をほどいて戸外をみると、どこかに月でも昇っているのか星影のかあなたに穂高の山稜がのしかかるように目近く仰望された。「夜の山は近くみえる。」とよくいわれるが冬の山はいっそうその効果がつよいようだ。午前四時には全員食事を済ませると、五時に先発隊としてOB矢崎、耳塚の二人が星のまだ淡くまたたく空の下を出発した。前日の上部のラッセルは、まるで雪中を泳ぐような深さで肩までつかった。それだけに今日はなんとか登路を確実に開拓せねばならないわけだ。後発隊は三人のアタック隊と二人の予備隊が一週間滞在するに必要な食料と個人装備のボツカで平均一人四

貫になった。その日前進キャンプには五人をのこして残りはベースへくだる予定になっていた。

午前十時前日の到着地点に登ったが、そのとき先発の二人は五十メートル上方でラッセルしていた。上半身だけが雪の上にみえるが、かなりの苦闘である。天気はよかったが風はつよく山稜から吹きおろす突風に息がつまりそうだった。途中ビスケットをかじり、テルモスのミルクをのんで明神のツルの高さにみえる地点までくると、前穂のピークが雪煙をあげて「怒れる巨獣」といった壮絶な風貌にみえた。そこでパーティは矢崎、中野、耳塚、次に藤岡、相馬、中村、さいごに三沢、金森、丸山と三班に分けて登った。いちおうの雪崩への警戒体制であった。すでに倶松帯でワカンが枝に引っかかったり、もぐったりして苦闘の連続である。やっと小さな沢にでた。上部は平坦で広くひろがり、この地帯さえ越えれば、あと小さな岩稜にとりついて前穂のピークまで雪の平坦な尾根筋がつづいていた。(二六一ページ周辺図参照) 三つに分れたパーティは沢筋の上部を左側の倶松帯に沿ってトラバースしようとして、電光形に小さくコーラスをとった。先頭パーティの矢崎、中野、耳塚の三人と、第二パーティの藤岡、相馬、中村とは約十五メートルほど間隔をとっていた。第一パーティはすでに上部に達して三人で竝んでトラバースをはじめた。つづいて三人は相馬沖之助がワカンの紐がゆるんだために待つ間、倶松に腰をおろして休憩していた。最後のパーティは、いくらか遅れ気味で、倶松地帯をやっと抜けて沢筋に入りかけている。第一パーティの先頭でラッセルを引きうけていたリーダーの中野和郎は、三メートル間隔でビスケルを斜めに構えて沢の中心にさしかかった。そのとき中野は足もとをすくわれたように全身のバランスを失い、踏んでいた雪が奈落へ吸いこまれて行った。その触感と同時にザザアという底深い不気味な響きをどこからともなく耳にした。「雪崩だ!」「雪崩だ、みんな逃げろ!」そんな誰かの声を聴き、また中野自身も絶叫していた。ほんの一瞬間の出来事だった。中野和郎たちが行動中の先頭パーティは反射的に倶松帯に逃げこみ、倶松の幹にしがみつ

ていた。地鳴りが夢魔のように白い奔流をうごかして沢筋をつたい下流へ末広がりに押しだしてゆくのが俯瞰された。雪崩の尻尾がゆっくりと斜面をくだり切って停止すると、しばらく沈黙した沢筋に恐怖と興奮のどなり声があちこちから湧きあがる。「そっちは大丈夫か!」「大丈夫だ!」下方から第三パーティの元気な声がした。すると同時に「第二パーティがやられた!」別の声が恐怖にゆがんで聴えた。中野が「誰だ?」と訊くと、「藤岡です。相馬、中村が……」と声をつまらせた。「やられたのか?」怒りに満ちた声で矢崎先輩がどなった。「やられました!」と藤岡の涙声が返ってくる。「畜生め!」と誰かが叫んだ。どこからどのように雪崩が起きたのか、まるで分らなかったが沢筋いっぱい雪が泡だち、すでにラッセルの跡も消えている。明らかに表層雪崩のようだ。二十二日から二十四日まで二日二晩にわたり上高地一帯は暴風雪にみまわれて二日近い積雪をみている。おまけにその日の朝は気温がいやに暖く、マイナス十二度だった。あとで判明したことなのだが、この沢筋の雪崩地点は草付で根雪の付着状態もわるく、二日の積雪荷重に堪えかねて表層の雪崩となってくずれおちたと推測された。相馬、中村がこの雪崩に呑まれたことは、もはや疑いなかった。せめて無事でいてくれたらと祈り、雪崩の泡だちの中からぼっくりと二人が姿をみせてくれまいかと一様の期待をいだいてみたが、それもむなしかった。

残された一行の中から耳塚忠治(高校二年)が伝令として、急を告げに岳川に設置している専修大と東京医大のキャンプへ救援をもとめ、さらに上高地の冬季小屋へむかった。中野たちはただちに捜索にかかったが、奥明神沢の雪崩は谷筋に溢れており、二十分ほどして最初に相馬沖之助を発見した。三沢教官が雪まみれになっている犠牲者を抱きおこして「相馬、相馬!」と悲痛に叫び、揺りうごかしてみたが、なんの反応もなかった。ちょうど第二パーティは俣松帯の端で休息して相馬がワカンの紐を結びなおしているとき雪崩に遭遇したのだ。いくらか体温はのこっているが、意識はまったくない。左足を骨折し、さら

に全身打撲の重傷である。せめて生きていてくれたらと一時間以上も人工呼吸を試みたり救護に最善をつくしてみた。だが体温はしだいに失われてゆき、生死の明暗も絶望視されつつあった。午前十一時半、万策つきて相馬は絶命した。遺体はシュラフに入れてベースキャンプに即日収容したが、中村は午後になって雪崩の末端で発見された。さしたる外傷もなく、まるで睡っているような姿態であったが、呼吸は途切れてすでに死亡していた。

三沢教官は、二人の死亡を確認すると、すぐにスキーをはいて上高地へくだった。すでに黄昏ちかく日は西の山背に沈みかけている。河童橋のたもとから西糸屋の前をぬけてホテルの冬季小屋を目ざした。つい二日前この同じ雪の道を全員で勇躍して岳川谷を目ざしたのに、いまや二人の若い隊員を失い敗残の落武者のようにくたがってゆく自分が腹だたしくならなかった。雪崩の危険についても降雪後の行動なので、十人の隊員を三つに分けて十分に警戒したはずだったが……愚痴とも諦めともつかないつづきを脳裡でもらして、彼は重いスキーを滑らせていた。

その同じ頃、玄文沢の出合付近の森林中で、戸山高校生二人の凍死体がうず高く積まれた薪の上に置かれていた。やがて薪に火がつけられたが、その頃から風が上空にうなり雪がおちはじめた。夕陽がとっぷりと山背に沈みきると、空は鉛色にけむり、火焰が夜空を赫々と焼いていた。いままた追いかけるように岳川谷で二人の高校生が、このアルプスの空たかく昇天したのである。

「ティの惨事が相ついだ。後に「高校山岳部の冬山入山禁止」となる先駆的なケースと目されて一部識者からつよい批判の声もあがったが、それ以上にビック・トビックともいわれる遭難が同じ穂高山域で、やはり十二月末から一月にかけて三件つづいた。

一件は梓川畔にそびえる明神岳五峯東壁での東雲山溪会大高俊直、有賀浩の十二月二十八日の遭難であり、さらに翌年一月二日の前穂高東壁で岩稜会若山五朗、石原国利、沢田栄介パーティが登攀中に若山が滑落死亡したものだ。そしてさらに三日には北尾根で大阪市立大山岳部パーティのもう一件が起きることになるのだが、いずれも使用のナイロン製ザイルの切断事故であった。東雲山溪会パーティの場合は、壁ちた大高は雪の吹きだまりに頭から突っこみ頭部の重傷で生命に別条なかったが、前穂東壁では若山が墜落死亡したためにザイルとしての耐久性が問題視されるにいたったわけだ。二つのケースは共に従来の麻製ザイルであつたら当然滑落が防止されたはずなのに、まるで薬紐のように簡単に切断された材質の脆弱さに問題があつた。化学繊維としてのナイロンは、米軍の放出物資として最初にその革命的な効能についての洗礼をうけて以来、登山用品として防水、防寒、軽量といった特質をもち、天幕、リュックザック、睡袋、アノラックなどの材料としていっせいに使用されはじめ、その効能についても定評があつた。ことにナイロン・ザイルは欧州アルプスやヒマラヤなどで外国遠征隊により使用されていたし、舶来品もいくらか輸入されていた。そのしなやかさ強靱さなど定評があつただけに、この冬山で連続した国産ナイロン・ザイル切断事故は材質への疑惑、さらに科学的データーへのつよい不信感を生み出すにはおかなかつた。岩稜会は、三重県神戸中学山岳部の卒業生を主体とした山岳会で、八高、名古屋大学山岳部OB石岡繁雄の情熱的な指導力によって鉄の団結を誇るともいわれていた。昭和二十一年夏、屏風岩正面を完登以来、明神五峯東壁の登攀などに意欲的な行動を示して、その実践力は穂高においても瞠目すべき尖鋭グループ

だった。石岡繁雄著『屏風岩登攀記』の一冊は一人のリーダーと一群の若いクライマーの烈しい闘志と情熱によって綴られた稀有の報告書であり、さらに写真集『穂高の岩場二巻』も同会の労作として知られている。

戸山高校、立教大学パーティが入山するのに数日おくれ岩稜会パーティ十二名も上高地の雪を踏んだ。冬季前穂四峯、東壁登攀が目標で奥又白の池畔にベースキャンプを設営した。年末の天候は西穂山上と同様わるく、吹雪がつづき行動は停滞しがちだった。だが翌年元旦を迎えてようやく天候も小康状態をみせはじめ、石原国利、若山五朗、沢田栄介の三人が東壁に向つた。午前六時又白池畔のキャンプを出発して八時に取付点に達して登攀を開始したが、壁の状況は極度に困難で、Aフェースの終了点から約四十メートルで日没となりビバークを余儀なくされた。三人はツェルトにくるまり氷の厚く張つた岩棚の上で一晩を明かし、翌二日午前七時半ふたたび登攀を開始した。

もはや頭上には四十メートルの壁しかのこされていない。前日に引きつづいて石原がトップとなり直上約十二メートルのクラックを登り、突起状の岩にザイルをかけて、なんとかダブルのザイルを利用して自己吊り上げ気味にオーバーハングを越えようと三回試みてみた。だがかぶつた岩は頑強に前進をこぼみ、もう一息で突破できそうにみえながらも前日からの疲労とビバークのための体力不足に力尽きて石原は下のテラスへ後退した。そこでトップを若山に交替することとなりジッヘルは石原があたることとなった。

「オーバーハングを避けて右手へ振り子式にやつたら」石原が指示したので、若山は突起にかかっているザイルを支点にしてトラバース気味にオーバーハングを斜めから越えようと攀じはじめた。若山が動きだすと、石原は上方を注視しつつ慎重にザイルをコントロールしはじめた。トップが岩の突起から右上方へ攀じ、しぜんザイルは支点を中心にして時計の針を逆にまわしたように四十五度近くのぼりかけていた。

前穂東壁での遭難の報は、郷里津島でめずらしく山にもゆかず正月を過ごしていた石岡繁雄の許に二日の夜もたらされ、ちょうど子供を連れて映画館にでかけているとき緊急の呼びだしをうけたのだ。島々の警察から中継された途切れ途切れの電話で、「誰がやられたんだ？」石岡の声に、遠い雪の山村からリダーの石原一郎の悲痛な声が応じた。「ゴロチャーン（若山）、クニートシ（石原弟）、サワダー」「どんな様子だ？」「昨夜は前穂東壁Aフェースでビバーク、猛烈な風雪なんではいまのところ救援は不可能。」「助かる見込みはないのか？」「いまのところ絶望的……」そんな応答がごく手短かにつづいた。

三日早朝、石岡は岩稜会のメンバーを集めると上高地へ出発——同夜十二時近く冬季小屋へ辿りついた。だが状況は現地に到着しても好転の兆候はみえなかった。翌日、奥又白から石原（弟）、沢田の救出の報告があつて、同時にナイロン・ザイルが切断し若山五朗がスリップして行方不明との報がもたらされた。石岡にとって若山は実弟にあたる。終戦直後、小学五年生の弟を連れて徳本峠を越え、屏風岩へ来たときの幼かった五朗、どうしても一緒に岩場へ連れて行けとせがんだ十年昔の光景が、つい昨日の出来事のように彼の脳裡に鮮明に想いだされた。すぐ「ゴロウノミゼツボウ、サイダイノフコウヲオワビシマス」との電文を両親へ打電のために電話局で大声でどなりながら、いくどとなく息をつめた。

翌日、石原、沢田の二人は手足を凍傷でやられ綱帯をぐるぐる巻きにして縋で運ばれてきた。

「ゴローちゃんは、たった五十歩ほど滑っただけなのにザイルはブツリと切れてしまった。ザイルは岩角で切れたのかも知れないけど、あんな弱いザイルってないよ。」と石原国利はうらめしそうに訴えるのである。このとき石岡は、はじめて明神五峯でも東雲山溪会パーティが十二月二十八日ナイロン・ザイルがなんのショックもなく切断して遭難しかけたという話を耳にしたのだ。そればかりではない、一月三日前穂北尾根登攀中の大阪市大山岳部パーティがやはりナイロン製十本のザイルがショックもなく切断さ

そのとき若山が「アッ」と短く叫んで左足を滑らせ、ジッヘルしている石原のいる地点にむかつて墜ちた。一瞬、石原は反射的に次に起る事態についてザイルを全身の力で支えようと身体の重心を低くして構えた。当然トップの落下にともなう衝撃を十分に予知していた。ラストの沢田も石原にかかる衝撃にたいしての補助的な態勢を整えていた。トップとセカンドとの中間には上方の岩の突起を支点として繋がっているのだ。まず落下の衝撃は岩角によって減力されてのちに確保者の肩におよぶのが、この場合の順序なのだ。それにもかかわらず石原の掌にしたザイルにはほとんどショックはなく、若山の滑落の直後に切断されたザイルの一端が虚空から彼の膝もとへ落ちて来た。その事態は下の二人には信じがたく呆然として黒い影をのこしておちて行った若山にむかつて「ゴローちゃん、ゴローちゃん！」と大声で絶叫したのはそれから暫くした後のことである。どう観察してもトップの滑落は岩角の支点から五十歩内外であり、その落下距離、岩壁の傾斜からずり落ちたようなスリップの状況から推理してもザイルの切断は常識的にはありうべからざる経緯なのだ。とうに寿命のつきた古い麻ザイルならともかく、こんどの山行のために前年十一月購入したばかりの新品のナイロン・ザイルなのである。東京製綱の製品で、八本のザイルでもマニラ麻十一本の抗張力に匹敵するし、もつとも重要な衝撃力についても約三倍の強度を有するとの折紙つきの登山用ナイロン・ザイルのはずなのだ。若山の滑落と同時になんの手応えもなくザイルが他愛なく藻紐のように切断された……二人ともなにか魔法の呪縛でもうけたようにAフェースの風雪の岩棚に絶望的な一夜を送らねばならなかった。

れたという遭難未遂の起こったことを知らされたのである。

ホテルの冬季小屋には前年末からの連続的な冬山遭難に、各新聞社の記者たちが詰めきっており、「ナイロン・ザイルは果して切れたか？」といった見出しで各紙に遭難記事と共に発表された。だが、これまでのナイロン・ザイルの信用度は高く「そんな弱いはずはないので、ザイルが傷ついていたか、ほどけたためではないか——」という批判も掲載せられてあった。そこで石岡繁雄は山岳雑誌、主要新聞に上高地で原稿を書き、ナイロン・ザイル切断の実相について訴えた。ザイル購入の模様から遭難時の詳細について彼は精力的にペンを走らせた。ことに鋭く刃のように尖った岩角の接触においては麻以上に脆いのではないかということを重要な疑点として書き添えたのである。

若山五朗の搜索は奥又本谷を中心として継続されていたが深雪のために発見しがたく、七日全員上高地を引き揚げるようになった。もしもザイルさえ切れなかったら弟も死なずに済んだのだ——と考えると彼の胸は怒りと哀惜に煮えたぎった。帰途、沢渡でバスを待つ二時間ほどの時間を利用してナタでナイロンザイルと麻ザイルをそれぞれに切り刻んでみた。するとナイロンは、すっぱりとカミソリで切ったように切断され、麻は鋸のようにごしごしこすらなければナタの刃では容易に切れないことが判明した。つまり、仮説として臆測した鋭い岩角における摩擦にナイロン製ザイルが薬紐のように脆いことを立証したのだ。登山者に「生命綱」といわれるザイルがこのように岩角に脆弱な点は致命的であると確信した彼は、なんとか真相を広く社会に発表して、以後の遭難を未然に防止しなければならないという使命感を心に灼けつくようにいだいた。同時にそれがせめてもの亡き弟への供養であるかのように信じられたからだ。

以後岩稜会の山行はいつさい中止されて、ナイロン・ザイルについての真相追究のために全員が働いた。事件のアービールのためにガリ版によるレポートの作成には徹夜したことも幾度かあった。クライマーの生

命保護のためにという一途な正義心が全員を愚かれた者のように熱中させた。だが、僅か五十歩のスリッパにナイロン・ザイルが切断されたとは信じがたい旨の反論はいぜん跡をたななかった。遭難原因をナイロン・ザイルの責任に転嫁したのではないかと疑いからのさまざまな臆説がなされた。ビバーク中にアイゼンでザイルを傷つけたのではないか、或いは尻に敷いて凍らしたのではないか——結び目がほどけたのではないか、凡ゆる推量グバートナーであった石原国利に集中され、岩稜会にたいして牙をむいて迫った。

すでに登山界だけの問題ではなく、一つの社会問題としてジャーナリズムでもとりあげ、一月十五日付朝日新聞では「今日の問題」として、「ザイルが何故も真直ぐに落ちて切れたというのならともかく五十歩かそこらずり落ちただけで切れるのはおかしい。そんなものは薬紐より弱いものである。最近では保証付と証して粗悪品を売るメーカーが多い。この事件は徹底的に究明さるべきだ。」と報じ、さらに十七日のNHKの「私の言葉」では石岡の父親が、「息子は新製品の試験台となって、あたら若い生命を落した。」と語った。これらの抗議によってメーカー側も深刻に事態を憂慮し四月二十九日工費百万円をもってザイル衝撃落下装置を篠田軍治教授の指揮のもとに東京製綱蒲郡工場において実験されることになった。

その前日石岡繁雄は岩稜会パーティと共に雪どけの奥又白に弟の遺骸発掘に夜行で出発した。かねて篠田教授もナイロン・ザイルの材質的欠陥については承知していたし、石岡はよく理解者と承知していたからだ。一行は雪のおちた第二テラス付近を探索したが、なんの手掛りもなかった。数日して後発のパーティも到着し彼らの手からナイロン・ザイル実験結果を報道した中部日本新聞一部をはじめ彼は目にしたのだが、その記事は寝耳に水の成行だった。内容はあらゆるケースに応じて実験を試みた結果その耐久性と強度は立証されて、前穂での事故の原因とみられる鋭い岩角による切断説は影が薄くなったというのだ。

奥又白の天幕内で一読した石岡は、瞋恚と不信感に全身を震わせて言った。「こんな莫迦なことがあるか、実験はマヤカシなんだ。」彼はその発表文を目にして、これまで考えてもみなかったためり込むような絶望を感じた。名大土木教室ですでに実験したし、鋭い三角形の鉄材のエッジで脆くも七、八十キの重量で切断されたナイロン・ザイルが専門学者の指導下での百万円の実験装置ではなんの異常も認められないというのである。信じたもののからの裏切り、背信、さらにその権威によっていまやジャーナリズムのむける眼も冷たかった。それ以上に彼の父親すらが、NHKでの放送を悔み、石岡の不誠実さを攻めたてたあげく石原国利を殺人罪で起訴するといいだす仕末なのだ。

四面楚歌の中にあつて若い彼らはさらに分厚い「ナイロン・ザイル事件」なる三〇〇ページに及ぶ歴大な報告書をガリ版で作成し、同時に篠田教授を石原の名によって名誉毀損罪で告訴した。のちの一冊のレポートに素材をもとめて作家井上靖は山岳小説『氷壁』を朝日新聞に連載、アルビニストの愛と死の哀歓を描いたベストセラー小説として広く一般読者からも評判をえたことはあまりにも有名であろう。だが同作品中においてもナイロン・ザイルの真相は明らかにされてはいない。アルビニスト魚津恭介は孤独な胸中にその謎を秘めたまま月光下の滝谷に独り死んでゆくのだ――。

かくて一九五四年クリスマス以後、翌年一月にかけて忙しくも六人の若者の生命を奪い去ったあの一ノ俣の一冬のように、上高地一帯を蔽った濃密な死の影は分厚く非情だった。六月に柳谷下流二俣付近で戸山高校の残る二名の犠牲者が発見され、七月には若山五朗の遺骸も奥又白B沢に切断されたナイロン・ザイルをかたく胴体に結んだまま夏日の下に仲間たちの手で収容された。

滝谷への挽歌